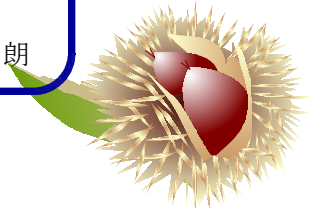


たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校 横山文朗



里の秋

昨日の音楽鑑賞会は、子どもたちにとってよい経験になったと思います。船穂小学校を卒業した自分たちの先輩、松本 百合さんのピアノ演奏を聴き、自分も松本さんのように世界で活躍するピアニストになりたいと思った子もいるかもしれません。

演目の中で、山浦文友香さんが、アイリッシュハーブで「里の秋」を演奏しました。「里の秋」は、昭和20年12月14日にNHKのラジオ番組「外地引揚同胞激励の午后」で川田正子さんが歌いました。

復員兵を励ます歌を作ってほしいとNHKから依頼を受けた海沼 實さんは、悩んだ末に以前に斎藤信夫さんから送り届けられていた「星月夜」を思い出します。「星月夜」は船橋市葛飾尋常高等小学校の教師をしていた斎藤さんが、開戦に興奮し一夜で書き上げた戦意高揚の歌です。一番と二番はほぼそのままですが、三番と四番が違います。彼は、敗戦後、小学校に戻り教師をしていましたが、多くの教え子を戦地に送ったことを悔い、教師を辞めようと考えていました。海沼さんの依頼を受けた彼は、三番に復員船で帰ってくる父親の無事を祈る母と子を描くことにより、当時の日本人の多くが抱えていた心の痛みを描き出そうとしました。

「里の秋」の歌が終わると同時にラジオ局の電話が鳴り続け、「何という曲か。」「もう一度聞かせてほしい。」とのたくさんの声が届けられました。川田さんは、その声にこたえて番組の中でもう一度歌いました。昭和20年は、大凶作で冬はとても寒かったそうです。ひもじさと寒さに耐えながら、父親の無事の復員に一縷の望みを託す母と子が、日本中の村や街のあちこちにいたのです。その思いは、兵隊さんの母親や父親、祖父母も同じでした。日本人の多くが「里の秋」を聞き、船に乗っていると信じたい肉親の姿を思い浮かべたのでした。

これほど日本人が愛した「里の秋」なのに、私はこの三番を習った記憶がありません。先輩の音楽教師から、「横山君、里の秋の三番は指導してはいけないのよ。」と言われ、その理由をたずねましたがはっきりとした答えはありませんでした。きっと、復員してくる父親を待つ歌では反戦の歌になると判断をした人たちによって、「里の秋」は海沼さんや斎藤さんや当時の日本人の思いを置き去りにして、単に深まり行く秋の情景を表現した叙情歌へと変わっていったのでしょう。

母と子が無事を祈った父親の多くは、復員船に乗ることなく、護ることができなかった椰子の島で亡くなっていました。この辛い記憶を私たちは忘れてはならないと思います。

里の秋

作詞 斎藤信夫
作曲 海沼 實
歌 川田正子

静かな静かな 里の秋
お背戸に木の実の 落ちる夜は
ああ 母さんとただ二人
栗の実 煮てます いろいろばた

明るく明るい 星の空
鳴き鳴き 夜鴨の 渡る夜は
ああ 父さんのあの笑顔
栗の実 食べては 思い出す

さよならさよなら 椰子の島
お船にゆられて 帰られる
ああ 父さんよご無事でと
今夜も 母さんと 祈ります

星月夜

作詞 斎藤信夫
(一・二番 略)

きれいなきれいな 椰子の島
しっかり護って くだいさいと
ああ 父さんのご武運を
今夜も 一人で 祈ります

大きく大きく なったなら
兵隊さんだよ うれしいな
ああ 父さんの跡を継ぎ
必ず お国を 護ります